
あの事件

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの事件

【Nコード】

N1271F

【作者名】

スグル

【あらすじ】

知らないという罪と、知りすぎる罠

（前書き）

『あの事件』は、今でも、彼を苦しめ続ける。

ある日の朝、僕が目覚めると、いつもの見慣れた日常の景色がなく、漆黒の風景ばかりが広がっていた。

どこだ、ここは…？

明らかに、自宅ではない中世ヨーロッパを意識したかのような白い壁に、ガラス細工のモザイクで作られた窓だけがある狭く薄暗い、小さな灯りの部屋に、僕が居る…。

そして、部屋には、顔見知りの居ない10人の老若男女が居た。なんなんだ？と、皆が困惑している。

すると、部屋の片隅にあったスピーカーから、音が流れた。

『ようこそ…、みなさん…。初めまして…』

人の声ではない。

機械で調整された声だ。

皆が、部屋の片隅にあったスピーカーに首を向けると、スピーカーから、信じられない一言が放たれた。

『いきなりですが…、みなさん…、この場に来たからには、入場料として…、しんでもらいます…』

僕は耳を疑った。

なんで？なぜ、死ななければいけないんだ…？
嫌だ…。

死にたくない…。

僕は、吐き気に襲われた。

.....

あの信じられない一言が放たれた数分後…。

僕は、落ち着きを取り戻した。だが、まだ胃が痙攣し、足が震えている。

他の10名は、落ち着いている人間と、パニック状態に陥っている人間とで別れていた。

「ふざけんじゃあねえ!!」

若い金髪の男が、壁を蹴る。見た目から解るくらいに、短気な男だ。

そして、彼を落ち着かせようと、若い女性と、中年のハゲ頭の男性が、その金髪の男の身体を抑えつけている。

「落ち着きなさいよ!」

女性が、そう叫ぶ。

だが、それでも、金髪が落ち着く気配をない。

すると…、一人、クスクス…と壁の隅っこで笑っている気味の悪い少年が居た。

こんな状況で、何故、笑っていられるんだ…、と思った矢先、少年のその笑い声は、金髪の男の怒りを買ってしまった。

「なにが、おかしいんだ!? てめえ!？」

金髪の男は、少年の元へ駆け寄り、首根っこをわしづかむ。

それを、女性が止めさせようと、金髪の着ていたジャンパーを引っ張る。

すると、少年は口を開いた。

「これって、さあ…、『あの事件』と、まったく同じだよね…」

少年が『あの事件』と言うと、皆が沈黙した。

『あの事件』…？なんだ、それは…。この様子では、この場に居る皆が知っているようだ…。

金髪は少年の首根っこを離して、今度は頭を抑えて叫んだ。

「うわああああ！！『あの事件』を思い出させるなああああああああ！！」

まるで、トラウマでも掘り返されたように、金髪の男が叫ぶ。

「ちょっと！君、『あの事件』を語るのはやめなさい！」

女性が『あの事件』と言った瞬間、急に冷静ではなくなり、少年を責める。

『あの事件』…。

急に、この状況を静まらせた、『あの事件』とは一体なんだ…。僕は、その女性に、『あの事件』について聞いてみた。

「えっ…、君、『あの事件』を知らないの…。」

女性が、鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情を浮かべた。

すると、他の人々も…、本当に『あの事件』を知らないのか…。と次々に僕の顔に視線を刺し始めた。

さつき、取り乱した金髪も、なんか急に冷静になり、

「えー、『あの事件』を知らないなんて、『あの事件』より怖いわ」

と、見下すような一言を、僕に浴びせた。
いや、だから、なんだ、その『あの事件』って…。
すると…。

「うおえ！」

急に、あのハゲ頭の中年が口元を抑えて、前屈みに倒れた。吐き
気を催したらしい。

女性が、その中年に駆け寄り、彼を介抱すると、

「まさか、『あの事件』を思い出して、気持ち悪くなったのですか
!?!」

と言う。

吐き気を催すまでに、『あの事件』というのは、とてつもなく悲
惨な事件なのか…。と、僕は『あの事件』の内容は知らないが、そ
の中年の様子を見て、恐怖した。

しばらくして、落ち着いた中年が口を開く。

「すみません、二日酔いなんです…」

どうやら、『あの事件』とは関係ないようだ。

だから、『あの事件』てなんだ?と思っていたが、誰も教えてく
れなかった。

.....

しばらくすると、また少年が口を開く。

「なんで、『あの事件』で起きたんだろうね…」

また、『あの事件』について語り始めた。

すると、油を染み込ませた紙に着火した火のように、僕以外のみんなが、『あの事件』について噛み付き始めた。

「いいかげんしろよ！『あの事件』を思い出させるな！」

金髪が口火を切ると、女性が、

「『あの事件』は、カロリーメイトがおやつに含まれるか、どうかで、話が拗れたんでしょう！！」

と、その事件の内容に触れるようなことを言った。

どうやら、カロリーメイトが関係あるようだ…。しかし、なんでカロリーメイトが関係あるんだと、僕は思った。

すると、金髪が、女性のその言葉が気に入らなかったのか、反論した。

「なに言ってたんだ、てめえ！？キムチが、意外とマヨネーズに合うことが事件の始まりだろ！？」

すると、女性が、それに反論。

「あなたこそ、なに言ってるの！？事件を解決した『ファイフティー・セレブ、神崎誠』に対する冒涇よ！！」

「ああ…、ファイフティー・セレブ、神崎誠が生み出した、セクシー割り箸割りは、確かに芸術的だったが、『お茶漬け少年、村村タモツ』のボーリングで、ピンに向かってピンを投げる行為が、事件を

解決に導いたんだろ！」

『あの事件』については知らないが、出てくる単語の一つ一つが、なんか凄まじいくらいに、僕の頭を混乱させる。

誰だ…、神崎誠に、村村タモツって…。

すると、またハゲ頭の中年男性が叫んだ。

「うああああ！！」

『あの事件』に関することを思い出したのか！？

みな、そう思っ、彼を見つめると、

「今日、返却のビデオを返すの忘れてた」

だから、なんだ。

………

しばらくすると、鍵がかけられていた部屋のドアが開き、みんな、部屋から解放された。

部屋の外には、黒服の男たちが待機しており、一人から、入場料のシャーペンの芯を回収していた。

僕は勘違いしていた。

あのアナウンスの『入場料として、芯でもらいます…』を、『入場料として、死んでもらいます…』と聞き間違えていただけだった…。

みな、何事もなかったかのように、芯を渡して、映画でも観終わったかのような感じで、背伸びをしている。さっきの金髪と、女

性もなんか和解した様子だ。

僕は、黒服にシャーペンの芯を渡しつつ、『あの事件』ってなんだ？と考え続けた…。

……………

「はっ！」

目を開くと…、僕は自宅のベッドで横たわっていた。いつもの見慣れた日常の景色。間違いなく、僕の部屋。

どうやら、わけのわからない夢を見ていたようだ…。

僕はベッドから起き上がり、学校の制服に着替えた。

そして、家族の居るキッチンへ足を運ぶと、テレビからニュースキャスターの声が聞こえた。

「『あの事件』の続報が入りました！？なんと、『ファイフティ・セレブ、神崎誠』のセクシー割り箸割りど、『お茶漬け少年、村村タモツ』のボーリングで、ピンにピンを当てる行為により、迷宮入り寸前だった『あの事件』が解決しました！！」

僕は耳を疑った。

キッチンで、おばあちゃんが、やっと『あの事件』が解決したんだー、と涙を流しながら、ニュースを見ていた。

それ以来、僕は毎日、ニュースを見るようになったが、僕は、今だに『あの事件』がなんなのかを知らない…。

（後書き）

小ネタマイペースで書いた『なんか、血生臭い俺の彼女』の逆に、一つのオチを、長々、引つ張る作品をやってみたい願望から生まれた今作。ホラー、サスペンス映画や、都市伝説に使われる手法で挑戦。今作はストーリーに重心を置いたので、それに沿うような形でキャラで作りました。オチはともかく、書いてて楽しかった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1271f/>

あの事件

2010年10月28日08時41分発行